

「別れた!? 彼女と? なんで?」

向かいの席でパンを食べていたノブは、驚いてそう訊いてきた。

「なんでって言われてもなあ…」

俺はうまく答えることができずに、パンをほおばったまま固まっている友人から目を逸らし、周囲を眺めた。

大学の学食は、昼時にしてはかなり空いていた。普段なら、この時間帯は座る席がほとんどないくらいに混んでいるのだけれど、今はもう補講期間に入っていて冬休みも同然だから、学生は数えるほどしかない。俺とノブは休講になった授業の補講があったから、それを受けに来ていた。

「わかった。お前、浮気したんだろ。なんてひどい奴だ」

「違う、ケンカしたんだよ。それに、別れた

って言うても、それから会ってないだけだ。…向こうはどう思ってるか知らないけど」

ノブは歯切れの悪い俺の答えに少し呆れたような顔をして、「じゃあ、そのケンカの原因はなんなんだよ。浮気じゃないってんならさ」と訊いてきた。

俺は少し躊躇して、言った。

「——お前、サ、ハ、ク、ロ、ス、つ、て、信、じ、て、る、か?」

ノブは、今度は完全に呆れたようだった。

「おいおい、いきなり何を言い出すんだ? それが何か関係あるのかよ」

「いいから、どうなんだよ。信じてるのか、信じてないのか」

「信じるも何も…、大学生にもなってそんなの信じてる奴いるのかよ。多分、小学生だって信じてねえだろ」

「だよなあ…、普通」

俺は落ち込んで、昼食のそばをすすった。

「で、それがどうしたんだよ。まさかサンタを信じる信じないでケンカしたとか言うんじゃないだろうな」

「……そうなんだよ、実は」

ノブは呆れるのを通り越して、俺を哀れむような目をした。口が開いている。

「明日はクリスマス・イヴだろ。この前、クリスマスはどこに行こうかって言ったらさ、その日はダメって言うんだよ。理由を訊いたら、サンタがプレゼントを持ってくるから、いい子にして寝てなきゃって言うんだ。最初は冗談だと思っただけけど、なんか本気みたいで。俺はバカバカしくなって、サンタなんていないって言ったんだ。それで——」

「ケンカになったと」

俺は頷いた。

「他に男ができたんだな、それは。きつとそうだ」

ずっと考えないようにしていたことを、目の前の友人はあっさり言いやがった。

「お前、慰めてくれとは言わないけどさ、もっと気の利いたことは言えないのか」

「だって、それ以外には考えられないんだからしょうがないだろ。サンタの話は単なる言い訳で、本当は誰か別の男と会う約束でもしてる

に決まっている。付き合い始めたのは、確か九月からだっけ? 大体三ヶ月くらいか。まあお前にシノちゃんももったいなかったよ。当然の結末だな」

「:お前みたいにはつきりものを言う友人がいてくれて、俺は嬉しいよ」

皮肉のつもりで言ったのだが、ノブはほめるなよ、と言って頭をかいた。

ちなみにシノちゃんというのは俺の彼女——否、元彼女のことだ。

「まあ、これでお前も晴れて独り身になったわけだ。どうする? クリスマスは男だけで飲みにでもいくか? どうせもう暇なんだろ」

「いや、そういうわけにはいかないよ」

俺は小さな包みを鞆から取り出し、テーブルの上に置いた。

「何だ? これ」

「クリスマスプレゼント」

「そうか、ありがとう」

「お前にじゃねえよ!」

俺はノブが伸ばした手をはたいた。

「ジョークだよジョーク。わかっているって。シノちゃんにだろ? でも、なんでそんな持ち歩いてるんだよ。まさかそれを渡してやり直したいってんじゃないだろうな。女々しいぞ」

「そうじゃないよ。クリスマスまでになんとかして、これに使った分の金を取り戻そうと思ってる。その決心が鈍らないように、いつも持ち歩いてるんだ」

「ケチくさい奴だな。売ればいいじゃん」

「そんな簡単なことじゃないんだよ。気持ちの問題なんだ。俺なりのけじめだよ」

でも、そうまでしないと未練が残るといふことは、俺はノブの言う通り、女々しいのかもしれない。だけどそれは、俺がそれだけシノのことが好きだったってことだと思う。

「でもクリスマスは明後日だけ? お前バイトしてなかったよな。どうやって稼ぐんだよ」

「そ、それは…、日雇いとか、いろいろ…」  
しかし、今のところ当ては全くなかった。「そんなに都合良く見つかるとは思えないけどな。ま、がんばれよ」

「お前に言われなくてもがんばるっつーの」  
俺はテーブルの上の包みを見て、自分に誓うようにそう言った。

俺は大学の近くで一人暮らしをしている。住んでいるアパートまでは少し遠いが、考えたい

こともあったので、今日は歩いて帰ることにした。

考えたいこと。それはズバリ、どうやって金を稼ぐか、だ。ケーキ屋とかならクリスマス当日だけのバイトの募集でもしていたのかもしれないが、さすがにもう締め切られているだろう。派遣という手もあるが、そんなに都合良く仕事が入ると思えない。

八方塞がりだ。

俺は途方にくれて空を見上げた。真冬の晴れた空はどこまでも高く、まるで俺だけが地面にたつたひとり取り残されたような気持ちになった。今日は雲ひとつなく、空は気持ち悪いくらい濃い青色をしているけれど、明日のクリスマスには雪が降るだろうと天気予報で言っていた。

「ほんと、中途半端だな…」

自虐的に呟いた言葉は、冬の冷たい澄んだ空気に掻き消えていった。

もし本当にサンタがいたら、シノとケンカなんてすることもなく、こんな気持ちにもならなかったのだろうか。

風が吹いてきて、一層寒くなった。ズボンのポケットに手を入れ、今更ながら徒歩で帰ろうとしたことを後悔していると、一枚の紙切れが

風に乗って俺の顔に飛ばされてきた。

「うわっ。なんだよ、ったく」

紙切れを顔から引き剥がした。よく見てみると、それは破れたチラシだった。

チラシには、アルバイト募集、と書いてあった。しかし、その内容が書いてある部分は破れていてわからない。周囲を確認すると、すぐ傍の電柱にこの紙の片割れらしきものが貼ってあった。近くに行つて切れ端を合わせてみると、ぴつたり一致した。

仕事内容のところには、ただ、サンタクロース、と書いてあるだけだった。

「なんだこれ……。サンタの格好をして何かをするのかな。だしたらケーキ屋か、あるいはおもちゃ屋とか……」

紙には地図が載っていた。どうやらそのバイトの面接は地図の示す場所でやるらしい。

しかし地味な広告だ。こんなもの、誰も気にしないだろう。その後ろの扉に貼ってある迷い犬探しのポスターのほうがよっぽど目立っている。何せ探している犬のカラー写真付きなのだ。これなら犬もすぐに見つかることだろう。

それにしてもこのバイト、よくよく考えてみると怪しいことこの上ない。いや、よくよくどころかちよつと考えただけでも怪しすぎる。し

かし、今の俺の状況を思うと背に腹は変えられないし、他に当てがあるわけでもない。

見たところまだ募集期間は過ぎていないようだし、とりあえず地図の場所まで行つてみることにした。

やばそうだったらすぐ逃げよう。

そう思つて、俺はそこへ向かった。

その場所までは迷うことなく辿り着いた。

それは——妙な雰囲気の家だった。

主に赤いレンガで造られているが、かなり古いらしく色がかすんでいる。屋根からは大きな煙突が突き出ていた。建築の知識なんてまるでない俺にだって、これは日本家屋ではないとはつきり断言できる。

この家を一言で表すなら——そう、サンタクロースの、住む家。

そんな感じだ。

でも、そんなことはありえない。サンタなんていないのだから。地図をもう一度確認し、この家間違いないことを確かめてから、俺は門を開けて庭を通り、玄関の前に立った。

呼び鈴がないのでドアをノックしてみた。両開きの重厚そうな扉は、その内側まで振動を伝えられるのかどうか判然としない。しばらく待

っても誰かが出てくる様子にはなかった。

もう一度、今度はかなり強めにノックしたが、それでも変化はなかった。

ドアノブに手を掛けてみる。鍵は掛かっている。いかにも重たそうな扉は、しかし、軽く力をいれただけで簡単に開けることができた。

「あのお、すいませーん。バイト募集の張り紙を見て来たんですけどー」

恐る恐る呼びかけてみると、玄関の近くにある階段の上から返事がした。

「今は手が離せんで、あがつて少し待つてくれんか」

俺はとりあえずその声に従い、脱いだ靴を不器用に揃えてから、横の部屋に入った。

家の中は、外観よりもさらに妙だった。

色調はほとんど赤で統一されている。しかしそれは鮮やかな色ではなくて、もつと落ち着いた、暖かい色だった。部屋の奥には暖炉があったが、火は点いていない。それでも室内は暖かく、俺は上着を脱いで、近くのソファに座った。

なんだか不安になってきた。ここはケーキ屋でもないし、おもちゃ屋でもない。なら、一体なんのバイトなんだろう。

すると、部屋のドアが開いた。

這入つてきたのはおじいさんだった。

赤いコート、赤いズボン、赤い帽子。全て白いフアーで縁取られている。そして、白いひげの生えた顔、太った体。その手には、白い、大きな袋。

まさに。

サンタクロースがそこにいた。

……コスプレ？

「この格好をするのは当日だけでいいんじゃないが、待ちきれなくてのう。なんせクリスマスじゃからな」

おじいさんはそう言うと、俺の前のソファに向かい合わせになるように座った。

「初めまして。わしはサンタクロースじゃ。よろしくのう」

……このじいさん、ぼけてるのか？

「おぬし、今、わしがぼけてると思ったじゃろ」

「え？ あ、いや、そんなことは……」

「隠さんでもよい。いきなりそんなことを言われて信じられぬのは当然じゃ。しかし、おぬしはここに来た。それはおぬしが、わしが本当に存在しているほしいと願つたからなんじゃ。なぜかは知らんがのう」

「……それは」

——思った。

もしもサンタクロースがいるのなら、シノは本当にサンタがいると信じて、あんなことを言ったのかもしれない。なら……

だけど、そんなことはこの人が本物のサンタだという証拠にはならない。いずれにしろ、もう面接は始まつていると考えていいだろう。だったら気になることは確認しておこう。

「あの、いくつか質問したいんですけど、バイトってまさか、本物のサンタのバイトですか？ ケーキ屋とかじゃなくて？」

半分以上冗談のつもりでした質問だったのだけれど、老人は真顔で頷いた。どうやら本気で言っているようだ。なら、この人が本物かどうかはさて置いて、なぜバイト募集なんてするのだろう。バイトのサンタなんて聞いたことがない。

「いや、実はのう、ソリを壊してしまつたんじゃよ」

彼は恥ずかしそうに言った。

「ソリって、あの、トナカイの引く？」

「そうじゃ、どうにも調子が悪くてのう。どうも一晩飛ぶのは無理そうだな。ソリが使えないとなると、人目につかぬよう、歩いてプレゼ

ントを配るしなくなる。この老いぼれひとりにはそれは無理じゃ。じゃからおぬしのような助けが必要なんじゃ」

「でも、サンタつていうのは、なんて言うか、夢の話でしょう、いろんな意味で。いいんですか？ こんなことをして、もしバレたら」

「そんなことよりも、プレゼントが配れなくなるこのほうがよっぽど問題なのじゃよ。そちのほうの子どもの夢を壊してしまふ。

それに、サンタが本当にいらなんて言つたところで、誰も信じないじゃろ、今のおぬしのように。信じるのはもともとサンタを信じていた者だけじゃ。それならもし知られたところで何の問題も無い」

老人はそう言つて、俺の目を見た。

「……なんで、俺なんですか？ 俺は、サンタクロースなんて……」

「言つたじゃろ？ おぬしがそれを望んでおると。それに、わしは困っている子を放つておけないんじゃ」

サンタクロースじゃからなど、彼は言った。

「どうやら迷つておるようじゃな。もし決心がついたら、明日また来なさい。これは、おぬしのためでもある。」

「俺のため？」

「そうじゃ。なにしろこの仕事の報酬は、おぬしが本当に望むもの、じゃからな」

俺の、望むもの…？  
それが一体何を意味しているのかよくわからないまま、俺はサンタの住む家を後にした。

3

次の日、俺はあの家に向かっていた。

まだやると決めたわけではないけれど、あの老人の言った言葉が気になっていて、それだけでも確かめようと思ったのだ。それが、一晩考えて出した、俺の結論だった。

俺の欲しいもの、それは…。

その時、道の向こうから歩いてくる人影に気付いた。

それは、シノだった。

彼女もこの近くで一人暮らしをしている。買い物帰りらしく、袋を両手で抱えていた。

向こうもこっちに気づいたらしい。無視するのは気が引けたから、挨拶をした。

「…おっす」

「あれ、珍しいね、こんなところで会うなんて」

ふと、目が合った。

なんか気まずい。

でも、もしかしたらこれはやり直すチャンスかもしれない。シノとケンカした原因は、サンタクロースがいるかないかだ。そしてあのおじいさんは自分がそうだとやっている。それが真実かどうかはともかく、俺が彼を信じさえすればなんの問題もなくなるのではないか。かなり牽強付会な気もするけれど、自分を納得させるにはいい案のように思えた。

「あのさ、ちよつと話したいことがあるんだけど、今からお前んち、行っていいかな」

落ち着いて話したかったからそう言ったのだけれど、シノの反応は変だった。

「い、今から？ ダ、ダメ！ えと、部屋が散らかってるから！」

シノは明らかに狼狽して、またねと言って足早に去っていった。

慌てて帰っていくその姿が見えなくなってから、俺はようやく気付いた。

料理の材料が入っているらしき、両手に抱えたスーパーの袋。家に行くと言った時の反応。そして何より、今日はクリスマス・イブだ。

結局ノブが言ったとおりで、引きずっていたのは俺だけだったらしい。

どうやら、欲しいものは手に入らないみたいだ。

なんだかバカらしくなった。

しばらくぼおつとしてっていると、紙の束を抱えた十才くらいの男の子が前を通り過ぎた。

なんとはなしに見ていると、その男の子は、持っていた紙を一枚、近くの電柱に貼って行ってしまった。それは、昨日見たのと同じ、犬探しのポスターだった。

これがあの子の欲しいものか…。

クリスマスになれば、欲しいものももらえる。そう信じている子どもたちのために、無性に何かをしてあげたくなった。

俺は、ダメだったから。

そして、どこか吹っ切れたように、俺はサンタクロースの住む家へと向かった。

彼は門の前で待っていた。辺りはもうすっかり暗く、月は雲に隠れていて、街頭の光だけが夜の街を照らしている。その人工的な白い光が、赤いサンタをより幻想的に見せていた。

「来てくれると思っておつたよ。それじゃさつそく、これに着替えてもらおうかの」

それはもちろん、サンタが着ている赤い服だった。覚悟はしていたけど、実際に着てみると

少し恥ずかしかった。

「そしてこれが、プレゼントを届ける家のリストじゃ」

そう言っただけじゃ、一枚の紙を俺に渡した。

「なんか、思ってたより少ないですね」

そのリストには数十軒ほどしか書いてなかった。

「わしがプレゼントを届けられるのは、わしを信じておる子どもたちだけじゃ。それだけ今の子どもたちから夢が消えておるのじゃよ。悲しいことじゃが。さて、もう行かんと夜が明けちゃうぞ」

サンタはプレゼントの入った大きな袋を渡してきた。

「え、でも、やり方とか教えてもらってないですけど」

「心配せんでもいい。おぬしはもう立派なサンタクロースじゃ。体が勝手に動いてくれるわい」

昨日の俺なら目の前の老人の言うことを疑っただろうが、今は違う。なぜかはわからないが、俺はこの人をサンタクロースだと信じていた。まるで、無邪気な子どものように。

「じゃあ、行ってきます」

空を見上げると、雪が降ってきていた。

それがサンタの力なのかどうかはわからないけれど、不思議なことに、俺が這入ろうとする窓は全て鍵が掛かっていなかったし、誰かに見つかれることもなく、プレゼント配りは順調に進んだ。数時間が経ち、日付はとつとくに変わって、いよいよ最後の家になった。

「ただ俺は、這入るのをためらっていた。」

リストを渡されたとき、真っ先にある名前が書いてあるかどうかを確認した。その名前は、確かにリストに載っていた。

それが——この家だ。

意を決して俺は中に這入った。部屋の中は暗い。けどもう目が闇に慣れているから、薄ぼんやりとだけれど、どこに何があるかはだいたいわかる。足音を立てないように気をつけながら、ゆつくりと歩く。ベッドの近くまで行くと、枕元に靴下があるのに気付いた。

まさかこんなものまで用意しているとは思っていなかった。とりあえずその靴下を取ろうと、手を伸ばしたその時——

何か生温かいものが足に触れた。

「うわっ！」

俺は驚いて、後ろに倒れてしまった。その何かは俺の胸の上のしかかっていた。

「な、なんだよこれ！」

すると、急に明るくなった。電気が点いたのだ。

俺の胸の上にあったのは、一匹の犬だった。犬種はわからないが、そんなに大きくはない。

そして——

「何してるの？」

シノはそう言っただけ、犬を抱き上げた。

4

「すごい、サンタになれたなんて！ いいなあ」

果たして人に話していることなのかどうか迷ったが、あのおじいさんは大丈夫なようなことを言っていたし、シノにストーカー呼ばわりされたくはなかったから、全部話した。

シノは意外にもすぐ信じてくれた。

いや、それが当然か。

彼女は始めから、サンタクロースを——信じているのだから。

「で、その犬はなんだよ。そんなの飼ってたかったらどろ？」

「実は昨日、ううん、もう一昨日か。拾ったの。ほら、ここ、ペット禁止じゃない。だから

バレたらいけないと思って、誰にも言えなかったの」

昨日会ったときはドッグフードを買いに行っていたのだとシノは言った。あの慌て方も、部屋に残してきた犬が心配だったのと、誰にも知られたくなかったからだそうだ。

「ごめんね、あの時は気が動転しちゃって。ケンカしたばかりだったし」

「いや、俺のほうこそ、ごめん。あれは俺が悪かった。」

「ううん、もういいよ。サンタも本当にいたしね」

シノは俺を見て微笑み、自分の膝の上で寝ている犬を撫でた。しかし、俺はなぜかこの犬を最近どこかで見ることがあるような気がしていた。一体どこで…。

——あ、思い出した。

シノと会った後に見た少年——あの子の持っていたポスターの写真は、この犬だ。

「……なあ、この犬を飼い主に届けてやりたかって言ったら、どうする？」

「え？ それは、それが一番だと思うけど、その飼い主が誰か、わからないし…」

「心配するなって。俺はサンタクロースだぜ？ 任せとけて」

俺は犬を抱き上げ、出て行こうとしたが、とても大切なことを忘れているのに気付いて立ち止まり、ポケットから小さな包みを取り出して、シノに渡した。

「メリークリスマス」

そして俺は欲しいものを手に入れた。